

失われつつある危機管理能力

島田 和 昭 ((一社)日本山岳レスキュー協会理事長)

1. はじめに

2022年春、奥深き残雪の山にてガイド登山中、下山時に3名の単独登山者に会った。道迷いの果て疲労困憊に陥り動けずにいた者、飲料も行動食もなくなり同行を頼んできた者、よからぬ方向に見えたヘッドランプの明かりに思わず呼び戻した道迷いの者。彼らはネット動画でルートの予習をして、スマホのGPSアプリも活用していた。加えて、装備はできる限りの軽量化をはかり、「携帯できる情報」は全て持って登山に臨んだ。少なくともそのつもりだった。だがしかし、彼らを引き連れ、雪道を下りながら聞いた詳細はあまりにも危機管理能力に欠けたもので、近年、登山者の間で増加している、にもかかわらず気がつくことのできない、「見えざる問題」を象徴する内容であった。

2. 遭難事情

以下に、私が聞き取りをした遭難事故一步手前に至った経緯、各々の考え方、行動を記載していく。

- ・こんなに遠いとは思わなかった。
 - ・こんなに時間がかかるとは思わなかった。
 - ・思ったより雪が多かった。
- ネットでは9-10時間で往復をしていたが、実際には15時間もかかった。
- ・GPSアプリの地図があれば大丈夫と思っていたが迷ってしまった。
 - ・道しるべのテープが少なく道が分からなかった。
 - ・踏み跡やテープがあると思っていたが、残雪が

部分的に溶けており、その都度迷った。

- ・GPSアプリの地図に頼り過ぎて、周りの地形をよく見ていなかった。
- ・疲労が激しくなりスマホGPS地図の確認が疎かになり、見通しのよい方向へと導かれてしまった。
- ・雪解け水を汲めると思っていたが、沢は雪に埋もれ、危険で汲めなかった。
- ・アイゼンやピッケルの準備が甘かった。ストックと6本爪アイゼンでよいと思っていたが、急斜面や硬い雪もあり、危険を感じるほど苦労した。
- ・日帰りのつもりで入山した為、ツェルトもなかった。
- ・薄暗い残雪の斜面は、ヘッドランプで照らしても見えにくく、何度も踏み跡を見失ってしまった。
- ・翌日天気が悪いとはつゆにも思わなかった。

このような山岳遭難事故、遭難予備軍は増えている。この傾向は、警察庁により数値化された、山岳遭難の概況にて定期的に明示されており、また、登山仲間、ガイド仲間、山岳会からの情報によっても明らかだ。もっとも私自身も、年間250日程度、山岳ガイドや山岳レスキュー隊員として登山に関わる仕事をしている中で、痛感しているところである。そしてそれらの事故のほとんどが、未然に防げるものであるということを、多くの登山者に知ってもらいたい。

3、ほとんどの遭難事故は未然に防げる

これは、各方面で活動している救助隊とのやりとりの中で、必ずと言っていいほど出てくる言葉だ。根拠は何だろう？ここで、いくつかの事例を元に考えていきたいと思う。

遭難事例1 里山ハイキング中の家族が誤って難ルートに侵入、途中で行き詰まる

兵庫県播州の山にて、岩場や鎖場で動けなくなったファミリーを介助して下山。コロナ渦に遊びを求めて里山に入り、ハイキングマップを頼りに熟練道を登っていた。登山の基礎知識はなく、レジャーの延長で入山しており、リスクを知らなかった。

→危険を感じる感度が高ければ、途中で下山できたかもしれない。不慣れな山道、足取りを見るからに明らかな運動不足、先へ行けば行くほど困難な状況に陥るのは誰が見ても明らかだが、本人達には判断ができない。もう少し想像力を働かせれば、避けることができたのではないだろうか。

遭難事例2 GPS地図に頼って登山中、古い徒歩道に迷い込み滑落死

滋賀県高島トレイルの山域を単独で登山中、実際は荒廃して使われていない登山道だが、地形図には記載されている徒歩道に迷い込み、滝上から滑落。

→道をよく観察していれば、また、もう少し経験値が



廃道になっている地形図上の徒歩道。この先の滝を無理に降りて滑落したと考えられる。

豊富であれば、登山道と呼ぶにはあまりに荒れた様子に疑問を抱けたのではなからうか。スマホの徒歩道という情報に感性を奪われた典型的な例だ。経験が少ないと、判断材料の中心が客観的な情報頼りになるのは問題だ。

遭難事例3 一般登山道でないルートでの滑落死

大阪南部の急峻な岩山で行方不明者がでた。警察消防による大規模な捜索が行われるも、発見には至らず。公的機関による捜索の打ち切り後、私たち日本山岳レスキュー協会に、ご遺族（この時点ではご家族）から、探してほしいとご依頼を頂いた。この件に関しては、当初から、地形の複雑さやルートの多さから捜索の難航が予想されていた。そこで、ご本人のパソコンの検索履歴を拝見させていただいたところ、山の裏側に位置している、通行困難の為あまり一般的ではないルートと、さらにその先にある滝について調べていたことが分かった。後日そのルートを検索すると、滝の延長上、かなり急峻な斜面に、誰がいつ設置したかも定かではないトラロープが張り巡らされており、そのロープ沿いにてご遺体を発見した。

→近年、ネット上には様々な登山記録やルートの情報が溢れている。それらは、未知のルートを目指す登山者にとって、とても便利で有益なものであり、ますます身近なものになっていくだろう。もちろん、我々ガイドやレスキューに携わる者達にとっても、なくてはならない重要な情報手段の一つとなっている。しかし、その情報は、本当に「自分にとって」正しい情報なのだろうか？ネットに溢れる情報の多くは、一般的、客観的な情報であるか、あるいはそうですらない極めて個人的な主観に基づく内容であることも少なくはない。大切なのは、誰かにとってではなく、「自分にとって」有効な内容であるかであり、それはあくまでも自分自身で判断できなければ

2. 登山界の現状と課題

ならない。

また現地での判断についても、雪庇の上の踏み跡を歩くように、ロープがあれば登ってしまう、というような安易な行動は問題だ。情報についても然り、現地の状況についても然り、判断を他人のロープに委ねてはいけない。自分で自分の判断に責任を持つことができれば、おのずと危険は回避できるものである。「自分にとって」どんなリスクがあるのか、それは回避できるものなのか？考え、感じ取ることを忘れないでほしい。

遭難事例4 猛暑での登山中に行方不明、熱中症・糖尿病の併発か？

兵庫県六甲山にて、集団の最後尾の登山者が体調を崩し一人で下山。道迷いから行方不明となる。本人からの通報にておおよその位置情報を特定、大掛かりな捜索を行ったにもかかわらず発見ならず。

➡「他のメンバーに迷惑をかけてはいけない」と思う登山者は、特に体力に自信のない初心者や中高年に多く見受けられる。しかしながら、体調をごまかしたり、下山のつきそいを断ったりする心理には、共感はすれども賛同はできない。これは、リーダーをはじめとする他のメンバーにも言えることだ。本人の意思を尊重する気持ちも理解できるが、体調を崩した者を一人で下山させるという行為に潜む危険性を十分に認識してほしい。「要らぬ気遣い」は命に係わる重大な問題ととらえ、全ての登山者が乗り越えるべき課題である。また、本件に関してはスマホの位置情報をもっとうまく活用できなかったのだろうか、という点についても疑問が残る。

遭難事例5 バリエーションルートを登山中に道迷い、位置情報を確認するが時すでに遅し

バリエーションルートでの事故は様々なケースが

起きている。ルートファインディングの甘さから道に迷い、身動きがとれなくなるパターン、無理に動いて転落しケガをするパターン、行方不明となつたのち、後日発見されるパターンなどである。近年目立つのは、ルートにそぐわない大量の登攀具で登っているパーティー。逆にロープも持たずに登っている単独登山者だ。

➡ある程度のクライミング能力があり、ルートの客観的な情報を有している、というだけではリスクが高すぎる。たとえ卓越したクライミング技術があったとしても、山を見極める力、すなわち山を捉えるマクロ視点と、複雑なハザードを見極めるマイクロ視点、双方を鍛える訓練を重ねていなければ、危険を回避するどころか察知することすらできない。特に、バリエーションルートのような高難度のルートに挑戦する際には、「小さなミスでも死に直結する」という想像力と感性をもって、全力で山を感じながら臨んでほしいものだ。



バリエーションルートでのミスは許されない。岩壁での救助はリスクが高く困難だ。

遭難事例6 温暖な気候から冬型気圧配置へと天候急変

特に目立つのはアルプスのゴールデンウィークで多発する気象遭難である。踏み跡や標識のある一般登山道、山の麓は既に温暖な春の気候、雪面に反射

した雪はまぶしく、登っていると汗ばむほどの好天。絶好の登山日和、と思ったのも束の間、ひとたび冬の気圧配置に変われば、そこは瞬く間に荒れ狂う真冬の山へと変貌してしまう。

→近年、気象情報のほとんどはスマホから入手可能になった。以前と比べれば、山岳地形の特性を踏まえた気象変化についても、ある程度読みやすくなった。しかしそれは100%正確とは限らない。ことに山の天気は非常に変わりやすく、現地での観天望気は不可欠だ。たとえスマホによる信頼度の高い情報があったとしても、風向きの変化、湿度の変化、雲の動きの変化、自然環境の変化を実際に目で見て感じることを、決して怠ってはいけない。

情報をうまく活用しきれず、危険を感じ取れなければ、体力、技術、プロ、アマ関係なく、どんな登山者でも等しく遭難する可能性がある、それが気象遭難の恐ろしさだ。天候の判断は登山においては生死にかかわる重大な問題であることを、常に心に留めて行動しなくてはならない。



このまま進んでよいだろうか。雲の流れ、風の動き、気温の変化、常に気にしてきただろうか。

4、「軽量化」は、装備だけでなく、思考にも及んでいるのではないか？

ここ数年、私が常々疑問に思っていることがある。それは、以前に比べ格段に情報が入手しやすくなり、装備の軽量化もどんどん進んでいるにもかかわらず、なぜ防げるはずの山岳遭難は増える一方なのか？ということである。登山のハードルが下がったことで、

初心者が増えているからだろうか。それも一理あるだろう。だが、それだけではない。ガイドや捜索活動を通して様々な事例に携わる中で、もっと本質的な根っこの部分に原因があるのではないかと感じるようになった。それが、この頁の冒頭に示した、『軽量化』は、装備だけでなく、思考にも及んでいるのではないかと？という考えである。

登山のハードルが下がったことで、より多くの情報を得ていれば、便利なアプリを使っていれば、もっと軽い装備を揃えれば、誰でも手軽に安心安全な登山ができる。そんな魔法のような考えが、知らず浸透してしまっているのではないだろうか。溢れる情報のおかげで頭は重くなったかと思いきや、実は軽くなっている。装備が軽くなったことでペースが上がり、行動範囲が広がったかと思いきや、実は体力が落ちている。このところ遭難件数が増加している要因は、情報に溺れ、感性が鈍ったことが根本にあるのではないだろうか？

登山は本来遊びである。だが、本気で感じる力を大切にしないと死に直結する。情報は活用するものであり、溺れてはいけない。自分でタクティクスを組み、考え、感じ、判断しながら山を楽しみ、危険を凌ぐことが何よりも大切だ。これは安全管理されている他の多くのスポーツとは全く事情が異なる点である。私たちが楽しむ舞台は自然そのものであり、白でも黒でもグレーでもない、生きて変化する舞台である。その変化を常に捉えようとする感性が、自然を相手に本気で遊ぶ好奇心や探求心が、想像力を育み、判断するための思考回路を広げる。

もちろん、登山中に迷いが生じることは誰にでもあることだ。そんな時は、手元にある情報を再確認することも大事だが、まずは深呼吸をして、己の感覚に耳をすませてみてはいかがだろうか。手始めに、最も分かりやすい自分の身体に関する感覚で想像し

2. 登山界の現状と課題

て頂こう。

例えば、木々の紅葉が美しい秋の登山の出発時、朝早いので気温は低く、とても寒い。よくある場面だが、そんな時にはどうしているだろうか。「今は寒いけど、これから行くルートは歩き始めてすぐに急な登りになる。自分は汗をかきやすい方だから、アウターを脱いでから出発しよう。」といった具合に、多くの人がルートや自分の体質を考慮して、衣服の調整をしてから出発していることだろう。もちろん、この場合、脱がないという選択をしても一向に構わない。大切なのは、自分の感覚やこれまでの経験に沿って、自分自身で判断をすることだ。

続いて、夏山シーズン真只中、北アルプスの山小屋でのこんな一幕。「周りの音が気になってなかなか寝付けなかった。」こんな時はどうだろう。「きっと、体力も判断力も鈍ってしまうに違いない。いつも以上に慎重に、ペース配分にも気をつけよう。無理をせず、昼までに登頂できなければ、宿泊先を手前の山小屋に変更することにしよう。その場合、下山ルートもこっちに変えた方がいいかもしれない。」といった風に、先々のことを想像して、あらかじめ決めておくことが大切だろう。そして、こういった内容は、遠慮せずにリーダーをはじめとする他のメンバーにも伝えるべきである。後々体調を崩してしまっただけでなく、自分だけではなく、パーティー全体を危険に晒すことになりかねないのだから。

次に、道迷いや天候の悪化といった、自分の身体と直結していない事柄に関して想像して頂こう。まずは道迷い。

ほとんど人が入っていないマイナーなルートに踏み入った。「地形図には徒歩道と記されているが、かなり荒廃しているようだ。出発してしばらくは、踏み跡やテープがあったけれど、この辺りから急に途絶えてしまっている。」こんな時は、どうすべきだろ

う。そのまま進み続けるか。いや、「地形図の通りに進むなら、こっちの尾根に進むようだが、本当にこれは正しいルートなのだろうか。道が変わっているかもしれない。周辺をよくルートファインディングしてみよう。行けそうになれば引き返すしかないな。」こんな風に、道や地形をよく観察して、考えながら進むべきだろう。そして時には引き返す勇氣も必要だ。

続いて、天候の悪化の場合を想像してみよう。人気の里山ハイキングルートにて。この日は午後から天気が崩れると天気予報で言っていたが、早めに出れば大丈夫だろうと登山を決行することにした。しかし、「出発時は晴れていたが、だんだん曇ってきたなあ。」こんな時はどうだろう。「気温も下がってきたし、風も出てきた。向こうに見える山は、すでに雨が降り始めているようだ。思ったより早く天気が悪くなるかもしれない。ちょっとペースをあげようか。レインウェアもすぐに取り出せるようにしておこう。」このように、観天望気をした上で、危険を回避する方法を模索した方がよいだろう。

いかがだったでしょうか。このように、私たちは登山中、様々なことを考え、感じながら歩いているはずである。しかしながら、山岳遭難や遭難一步手前の事例は後を絶たない。疲れで観察が疎かになり、見通しのよい方へと引き込まれていないだろうか。焦りでパニックに陥っていないだろうか。あるいは、このくらいなら大丈夫と、正常性バイアスを加速させ、現状を過小評価してはいないだろうか。自分にとって不都合な事実から目を逸らしてはいないだろうか。

道に迷っても、戻ることのできる登山者は、早くから危機を想像し、思考回路を広げ作戦を練っている。彼らの多くは、事前によく観察しながら歩き、タクティクスを組み、山を捉えているだろう。それ

は山が危険であると認識している証拠であり、生きる力であるとも言える。つまり、危機管理能力を備えているということだ。今一度、自分自身の登山を振り返ってみてほしい。己の感覚に従って、想像力を働かせ、正しい判断を下せているだろうか。情報に操作されていないだろうか。安易に鵜呑みにして、大丈夫だと思い込んではいないだろうか。その思い込みが、装備だけでなく思考までも軽量化してしまっていることに、危機感を感じられなくてはならない。

5、取り戻せ 本能

「登山」という遊びは、自然の中に身を置き、まるで自然と一体になったかのような感覚を楽しむことができる、いわば「最も人の本能に則した遊び」のひとつなのではないか、と私は思う。その登山が今、一部の登山者の間でとはいえ、「本能」から遠ざかった、ただの「攻略すべきゲーム」のようになり果ててしまっていることを、私は危惧している。

情報網は、今後もますます発展し、便利なアイテムはどんどん増えていこう。ネットの情報をよく考えもせず鵜呑みにして、自分が遭難予備軍の一人となっていることに気がつきもしない登山者たち。自らの承認欲求を満たすために、やたらとハイペースな登山記録をアップする人々。このままでは、遭難件数はますます膨れ上がり、日本の自由な登山文化そのものが危機に瀕してしまうかもしれない。

この流れを断ち切る術はあるのだろうか？答えは、私たち登山者自身が見つけていくより他ならない。まずは、ひとりひとりが、情報に溺れることなく、選別できる力を養うことが必要だ。個人の主観に基づく投稿を規制する事はおそらく不可能だろう。いや、そもそもネットは直接的な遭難要因ではない。アプリやハイペースな記録をアップする者たちからは、悪意を感じることはなく、それどころか善意を

感じるものがほとんどだ。要は、受け取る側が判断することが大切なのだ。便利な地図アプリは、もはや安全登山に欠かせないものであり、ぜひとも広く活用して頂きたい。だが、それにより自分で考える力が衰えてしまっは元も子もない。



取り戻せ 本能を！

登山は自己責任である。しかし、個人主義というわけではない。勝手に過ぎぬよう、情報を発信する者、そしてそれを受け取る者、双方が己の考えに責任を持ち、正しい知識と経験を積む努力を怠ってはいけない。そして、自分にとっての安全基準を模索し、救助に頼らない登山を心掛けるべきである。

ほとんどの遭難は、「本能」によって回避できる。動物の仲間であり、自然の一員である人間は、本来この「本能」という名の危機管理能力を十分に備えているはずだ。目で見て、音を聞き、匂いを嗅ぎ、肌で山の変化を感じよう。先人たちの「背中を見て学べ」という姿勢は、感性を養うための大事な教えであったはずだ。今こそ、思い出せ。取り戻せ、本能を。

最後に、私たち山の仕事に携わる者たちは、安全登山に関する知識を、より一層広めていかななくてはならない。そして、この「最も本能に則した遊び」である登山を、より多くの人に安全に楽しんでもらいたい。そんな決意と願いを込めて、この文章を締めくりたいと思う。